に在つた筈である。但し、今猶ほ此の割目の兩壁にある洞穴中に前記の不思議なものを見出されようと云ふ譯ではない。此の礫石斷崖は一塊になつて粘土の床上を滑るやうなことや崩れて散亂する程のことは無いにしても、春になると絶えず雨水の流れる谷ではあるし、其の水の爲には容易に分解される筈であるから、今其處に洞穴があつてもそれは當にならない。然し、此の邊の周圍五百米突内には、今でも伽籃六個塔十二個程のものが歴然としてゐるやうな譯であるから、前記指定の場處が格別尊い處であることを證明するには充分である。扨て、目標點たる前述の兩地點が定まると、もうそれでナガラハーラの位置を定めることが出來る。即ち、現代市街地の西南郊外、土地の傳説に古代の一「ベグラーム」と云ひ傳へられる其の地に外ならぬのである。そこで、舊都の東方に(玄奘法師の傳記には「東南に」と出てゐるが、此の想定の場合としては寧ろ其の方が正確ではないかと思はれる)阿育王が建てたものと見做されてゐる大きな塔は要するに、昔は金屬で包まれてでもゐたかと云ふやうに、今ではアヒン・ポシュ Ahin-Posh の名の下に知られる其の巨大な「塔」で